

近代の遊園地に投影された洋館への憧憬 安野 彰

戦前まで、多くの遊園地は、現代のようにライド・マシンがひしめく場所ではなかった。人びとは、園内での散歩、食事、観劇、入浴などを楽しんだ。すなわち、江戸名所的な行楽地が、慣れ親しんだ遊びの場として、一定の敷地内に再構成されたのが、近代日本の遊園地であったともいえる。園内の主要な施設は中央に構える建築物で、その周囲を庭園やその他の設備が取り巻いているという形式が少なくなかった。

名所的空間をベースにする一方、施設の顔となる建物は、西洋の様式建築かモダン・デザインというのが当時の相場で、四周を塀などで囲まれた敷地奥に異国の建築を構えるという空間構成を見ると、遊園地と明治以降のお屋敷としての洋館は相似の関係にあった。

すなわち、当時の遊園地に投影されたもうひとつの原風景として、洋館を捉え得る。ここでは、そうした視点から、当時の社会において、洋館のイメージや憧憬が、住宅という枠を超えて機能し、強い意味を持っていたことを例示したい。

お屋敷に遊ぶ

維新を経て後、江戸市中の多くを占めた武家屋敷は、その用途を変えていく。官軍側の要職に就いた人びとの居所となったり、農地化されたりしたが、なかには、娯楽施設に転用されるものもあった。美濃高須藩松平氏の四谷上屋敷は、その大半が町屋に替わったものの、桐長座という劇場や人造温泉場が開設された。摂津の守の屋敷だったことから、「ツノカミ温泉」という呼称が使われたそう。多くの遊客を集めることができたのは、もともとここに、美しい庭園があったためとされるが、新たに普請されたかもしれない劇場や温泉場の建物の詳細は不明で、洋風建築であったかはわからない。その後は、庭も温泉劇場も取り壊され、芸妓の巢窟になって、大正初頭には跡形も無い状態であったとされる。

ここで着目したいのは、お屋敷の地所が娯楽場に変わっているところである。遡れば、江戸期には、大名庭園が庶民に解放されることもあった。こうした経験を下敷きに、自然な成り行き

で、明治以降のお屋敷たる洋館を思わせる遊園地が出現したのでは？と思えてくる。

明治二二

年、大阪の今宮に開場した「借楽園商業倶楽部」の園内には、商品陳列館、蒸気機械館、諸機械模範館、報告室、内外諸新聞縦覧室、大広間、室外運動場、競馬場、遊園茶室、浴室、小亭、割烹、茶店が設けられ、物品の陳列、情報収集、懇談会や会合



図-1 借楽園商業倶楽部

会員の利用に供するものとされたが、明治二八年の記述では、入場料さえ払えば誰でも使用が可能とされ、また、三二年発行の『南海鉄道案内』に、

「洋館あり和屋あり舞台あり小亭あり、山を築き池を掘り樹を植多瀑を落とし橋を架け、鳥を放ち、魚を養ひ、料亭あり茶舗あり温泉あり、和洋折衷の一大別業。始めは園内の長屋にて、諸産物をひさがせ、勸商場の体裁でしたが、今はそれを止めて、ただ遊園一方となり、二銭の入場賃を取て、公衆の遊び場に供へてあります。」

と記されているように、この頃には、不特定多数の利用する遊園地として認識されていた。冒頭にある「洋館」は、五層の洋風楼で、周囲を塀で囲われた敷地の高台に配され、本部として機能していた。全体として、明治のお屋敷型の構成を採っていたことがわかる。

なお、同時代、神戸和田岬にあった「和楽園」も、眺望閣という洋風三層楼を中央に配し、「偕楽園」と同様の構成であった。

遊園地利用者の声を聞くことはできないが、彼らは、塀に穿たれた門をくぐり、庭園を横目にやがて洋風建築に迎えられ、お屋敷としての洋館の客として振る舞えたのである。全てではないにせよ、当時の遊園地は、こうした

魅力をどこかに意識されて存在したのではないだろうか？

大正以降の遊園地と洋館

小林一三が主導し、明治四四年に開園した「宝塚新温泉」においては、社会状況が変化した結果、それまでとは少し違った意味が加わって、洋と和の対比が意識的に用いられた。

明治末頃の娯楽といえば、まだまだ男性中心で、温泉地においても花街を介した遊びが核を成し、子供や女性が客として楽しむ場は限られていた。一方で、就学率が九割を超え、小学校で習う西洋音楽や椅子での生活が広く社会に浸透しつつあったのもこの頃で、大正時代に大衆文化が開花するのこのような下地が形成されていたためである。

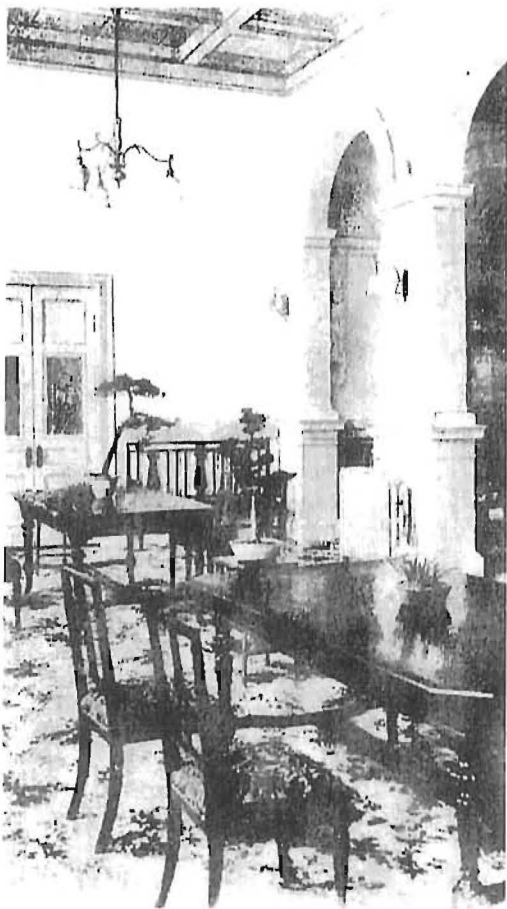


図-2 宝塚新温泉休憩室

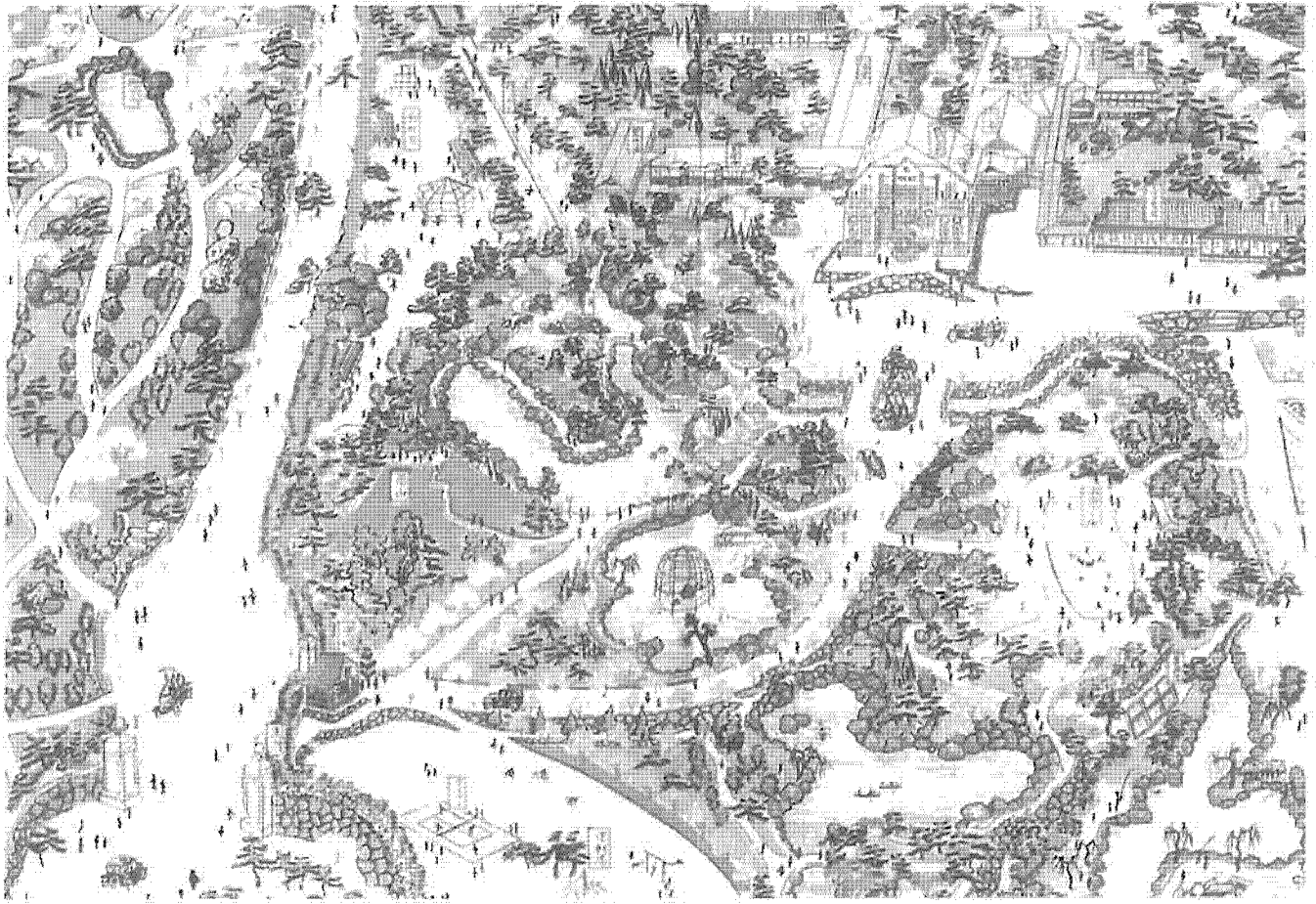
「宝塚新温泉」はそうした時代の転換期に生まれた遊園地であった。明治三〇年の阪鶴鉄道（今のJR線）開通で賑わいを増していた宝塚も、例外に漏れず武庫川右岸の温泉に花街を擁していた。新温泉が、この和風建築がひしめく旧温泉の対岸に、ルネサンス風の木造洋館として建設されたのは、西洋文化を理解し享受することができるようになり、大衆の存在を見据えた小林の戦略のひとつであったと考えられる。同時に、男性中心の娯楽文化に対峙し、新しい時代を担う象徴として、女性と子どもが持ち上げられた。

上流層の住まう西洋館への親近感を伴った憧れを受け止め、彼らを魅き付ける装置として、新温泉の洋館は、箕面有馬電気軌道（現阪急電車）の終点に忽然と姿を現した。浴室、婦人化粧

室、休憩室、ビリヤード場などのインテリアも、しなやかな曲線を基調にデザインされ、一定の質を保っていた。天井も高く、豊かな空間が多くの浴客を迎え入れるようになっていた。石張りの床や壁、シャワー設備は、当時の公衆浴場のなかでも極めて先駆的なものであろう。

新温泉開設の翌年七月には、娯楽館パラダイスが新設される。大正三年以降、ここで、唱歌などの西洋音楽を基調とした少女歌劇を公演することになる。建物は、ゴシック教会のような全体的な体形で、アール・ヌーボー調の意匠が施されていた。また、これに接続して、大正二年の婦人博覧会の際に、木造二階の洋風建築が新設されている。その後、パラダイス新館として、レセプション・ホールと称するパーティ会場と図書室に充てられた。

当初の新温泉は、入浴や観劇などが主な娯楽で、そうした点では、他の遊園地に際立つわけではない。新式の娯楽を導入するよりも、浴場の仕様や意匠、演劇の質における刷新に力点が置かれていた。それだけに、建設された西洋館には、少女歌劇とともに、既存の娯楽施設との差異や洋風文化に親しむ新しい世代を象徴し、遊園地という場所の空気を醸すという重要な役割があった。言い換えれば、人びとは、



図—3 別府鶴見園 (部分)

洋館の建築を通して、遊園地の空間に魅せられていったのである。

宝塚のコンセプトを意識した遊園地は、「ツノカミ温泉」以来のお屋敷のような形式を継承しつつ、東京をはじめ全国各地に開設されていく。金沢の「粟ヶ崎遊園」、「別府鶴見園」、「別府ケーブル遊園」には、明らかに、園の顔として、西洋館が設けられている。面白いのは、周囲の建物は洋風でもなく、和風建築が目立って、明治のお屋敷と同様の対比ができているところである。また、「青梅楽々園」は、洋館のホテルに併設されていた遊園地で、多摩川の溪流沿いに開設された。入り口は別々であったが、あたかも、洋館とその庭のような構成になっていた。東京の「多摩川園」や「京王遊園」は、主屋の建築様式がモダニズムであるが、以上のような系譜を踏まえると、お屋敷としての洋館を祖形にした遊園地の延長上に置ける。

*

このように、階級社会であった当時、人びとが思い描く憧れや非日常性は、自然と上流階級の生活の場と象徴である洋館に形を結び、それが遊園地という場所に現象していたと見ることができ。

厳密には、当時の人びとがどれだけ遊園地で洋館を意識していたのかは判

らない。しかしながら、資料を追っていると、どうも、そういう雰囲気や空気を私自身が感じてしまう。時を経て僅かな情報からさえも漂う何ものかがあるということは、それだけ、洋館のイメージが社会において、大きなウェイトを占めていたと考えざるを得ない。翻って、現代の遊園地には、人びとの憧憬が醸し出す穏やかな場所の空気を感じにくい。個々の設備の新しさや賑わいによる雑駁さのみがどうしても先行する。今や、建築がつくるインテリアや風景が、意味を与えられて魅力を発している遊び場は得難いものとなったのだろうか？

そんな中、シンデレラ城という西洋館？を顔にしている「東京デイズニールランド」が多くの人びとの心を繋ぎとめている。これも、キャラクターとともに、建築やそれらがつくる風景があつてのことだと改めて建築の力を再認識させられるが、この数少ない成功事例が、専ら架空世界への憧憬に依るということを、素直に受入れられないでいる。

安野 彰/やすの あきら

文化女子大学造形学部住環境学科専任講師。一九九五年、東京工業大学工学部建築学科卒業。二〇〇〇年、同大学院総合理工学研究科人間環境システム専攻博士後期課程修了。博士(工学)。日本近代の都市、建築の歴史を主な領域とし、近代の娯楽施設、郊外、行楽地等を研究している。